

平成 28 年度第 2 回福岡市美術館協議会 議事録

日 時	平成 29 年 3 月 16 日 (木) 14:00～16:00
場 所	福岡アジア美術館 会議室
出席者	協議会委員：後藤会長外 計 14 名 福岡市美術館：錦織館長外 計 11 名 福岡アジア美術館：森館長外 計 7 名
議題	(1) 福岡市美術館 平成 29 年度事業計画について (2) 福岡アジア美術館 平成 29 年度事業計画について (3) その他

1 開会

2 館長挨拶 (内容省略)

森福岡アジア美術館館長挨拶

3 議題

- (1) 福岡市美術館平成29年度事業報告について
事務局より報告
- (2) 福岡アジア美術館平成29年度事業報告について
事務局より報告

会 長： 各館の事業計画について関心・疑問など自由にご意見をどうぞ。

委 員： 購入予算におけるふるさと納税制度による寄付(以下、本議事録において、「ふくおか応援寄付」という。)はプラスアルファであり、前回の協議会で実際の購入予算を上げる努力をした方がいいと意見したが、どのような計画を立てて、例えば市民の皆様への認知度と理解を高め、市議会議員の方々に理解してもらえるように働きかけるなどの行動をし、29年度にどれくらい予算を確保できたのか。

事務局： 8月にいただいたご意見を9月の予算要求に反映させることは難しく、29年度の購入予算は、前年度同額の500万円である。アジア美術のコレクターはおらず、寄贈や寄託を受けることが困難であるという状況を財政部局に説明し、購入予算について改善していくとともに、寄贈や寄託をしてくれる方を探す必要があると思う。

事務局： 500万円の購入予算を確保するために、他の展覧会予算を削減する努力をした。

事務局： 29年度の購入予算は16,098千円であり、このうち900万円が「ふくおか応援寄付」の分であり、残りの7,098千円は買戻しのための予算である。

委 員： 両館とも素晴らしいコレクションを持っているが、継続的に予算を確保しないと数十年後にコレクションの年代に穴ができてしまう。今の予算だと継続的なコレクションの維持は厳しい。将来の両館の価値を保っていくために戦略的・戦術的に予算の確保をした方がいい。アジアの中核都市としての福岡市の規模を考えるとあまりにも予算が少ない。

会 長： 予算の確保については両館とも鋭意努力していただきたい。今年度の「ふくおか応援寄付」について、9人で900万円も集まっているというのはすごい。福岡市美術館については、本来の購入予算よりも「ふくおか応援寄付」分の方が多い。当面は、この方法で予算を確保するのも一つの手だと思うので、「ふくおか応援寄付」のシステムを一般市民にわかりやすく普及していただきたい。

委 員： 「ふくおか応援寄付」での予算の確保は予想がつきにくい。本来の購入予算を増やす努力をしないと、長い目で見たとときに良くない。この協議会でも知恵を絞って応援した方が良い。

会 長： 予算を獲得するためのアイデアを委員の皆さんにも出していただきたい。

委 員： アジアの、海外の主要都市も含めた、他都市の美術館の購入予算は調べているのか。

事務局： 調べていない。

委 員： それと比較することで福岡市の購入予算が明らかに少ないことがわかる。予算確保の説明材料の一つとして使えるのではないか。

会 長： 来年度の予算要求の際に、具体的なアクションを起こしていただきたい。予算の確保について、今後の両館の見通しはあるか。

事務局： 市の財政状況は非常に厳しく、毎年、前年度比で削られた予算の中で必要経費を確保しており、その予算の枠内で購入予算を算出している。また、寄付などで財源を自ら確保することで予算を確保する方法もある。当面はこの寄付で予算を確保できるよう模索しており、来年度の4月1日から寄付先を福岡市美術館だけでなく、アジア美術館や福岡市博物館も選べるように制度を変更する。より多くの寄付を募るために、来年度は広報を戦略的に展開していきたい。

委 員： 今後、福岡市は無形の価値をどうやって上げていくかというのが戦略として必要である。海外からの人の呼び込みや、都市としての価値を上げるという部分で、美術は大きな無形価値がある。費用に対してすぐに収入はでないが、そこを理解した上で戦略を組み立てていかないと、今後の都市間競争で戦えないと思う。美術の価値を内部や外部の人に啓蒙し、市全体で応援する風土をつくっていかねばならない。前年度比で予算を考えていては、その枠から出られないので、購入予算については、その枠ではないということを定義づけしてほしい。また、その枠を超えるアイデアを教えてください。

事務局： そのアイデアを委員の皆様から出していただければと思う。

委 員： 予算確保のための具体的な説得材料の1つとして、「ふくおか応援寄付」で集まった額がどれだけ美術館に関心があるかという指標になると思う。福岡市の寄付の中でも、特に美術館に寄付が来るよう積極的に宣伝してほしい。

事務局： 「ふくおか応援寄付」の中でも、福岡市の場合は美術館の美術品購入に充てることができるという、全国的にも非常に珍しい制度となっているので、まずは福岡の方に知ってもらおう努力をしなければならない。そこで、来年度は、「ふくおか応援寄付」全体のパンフレットに加えて、ミュージアム施設3館だけのパンフレットを別途作成する。また、寄付金で購入した作品を広報して、寄付の力でこれだけのことができるということを知っていただき、一般の方が寄付をしようと思うような意識付けをしていき

たい。

委員： 美術館ができた当初は日本で一番予算があり、次々と購入していたが、どこの美術館も今は厳しい。両館とも集客に対して非常に努力しているが、なかなか集客できていない。自分が高校生の時は毎年、授業で美術館に行っていた。現在はどのようになっているかはわからないが、小中高生がもっと美術館に行くべきだと思う。小中高生への集客をもっと考えた方が良いと思う。

委員： 金沢21世紀美術館では、開館時に小学生を無料にして全員美術館内に来るようにした。将来の美術館への納税者になる方の理解をもらい、その中から寄付をもらえるようにするために、全ての展覧会で小学生を無料にしてはどうか。

事務局： アジア美術館主催の展覧会については、平成14年から小中学生全て無料にしている。

委員： アジア美術館が主催でない報道機関主催の特別展等の展覧会についても無料としているのか。

事務局： していない。

委員： 主催でない展覧会についても無料にした方が、賑わいという意味では人が増えると思う。交渉の問題だと思うが、保護者などの大人も来ることで料金を回収できるということを説明してはどうか。

会長： 収支をどう承諾してもらうかという問題である。福岡市美術館では、小中学生を無料にしているのか。

事務局： 両館とも常設展については、中学生以下無料である。ただし、特別企画展については、実行委員会で運営しているので、無料というのはい少ない。

委員： 小中学生を無料にすることでその親も来るという効果を実行委員に説得できれば無料に変えられる可能性はある。

委員： 小中学生が無料で観覧できることは良いことだが、小中学校が授業の中で体験学習として来られるようにできないのか。

会長： 授業については、美術館のシステムというよりも教育委員会のシステムではないかと思う。

委員： アウトリーチ事業については非常に興味深い。「どこでも美術館」についてだが、複製作品を持っていくよりも、本物を持っていく方がより効果的だと思うが、できないのか。また、実際に実施して、どのような手応えがあり、今後どうしていきたいのか。

また、高齢者を対象とした「いきヨウヨウ講座」での活用も検討しているのか教えてほしい。

委員： 市民は実施しているところを直接見られない。どうやって実施内容を広報しているのか。

事務局： 作品の持出しについては、レプリカだけでなく本物も持ち出している。例えば、シャガールの絵などは本物の持出しが難しくレプリカを持ち出しているが、陶片などの作品は本物を持ち出している。また、現代作家である藤浩志氏にはオリジナルの作品を作ってもらっており、子どもたちが間近で見て学ぶことができる。持ち出している作品はレプリカよりも本物の作品の方が多い。

事務局： 「どこでも美術館」では、子どもたちにアンケートを実施しており、子どもたちへの手応えは感じている。一方で、先生については、非常に評価してくれる方がいる反面、学校の教育システムには当てはまらないので不満を持つ先生もいる。今後、先生と協議をしながらブラッシュアップしていくつもりだ。

また、実施内容の広報については、メディア関係者に取材に来てもらいテレビで放映されたことがあるが、現在は学校を対象としており、子どもの顔をホームページ等に掲載することができないので、どのように広報していくか課題がある。

リニューアル開館後については、福祉施設などで、高齢者や美術館に来られない人を対象にしていることを考えている。

会 長： 欧米では、館長はボランティア団体や個人からお金を獲得してくることが仕事である。「ふくおか応援寄付」で美術館・博物館を指定できるなら、3館で競い合ってはどうか。また、可能であれば、納税者に対して年間フリーパスを渡すなど優遇してほしい。財政が非常に厳しい状況であるなら、この「ふくおか応援寄付」のシステムが続く限り最大限活用して、予算を獲得してほしい。

福岡市美術館は休館を機に、コレクションを他館に貸すなど、内部に集中していた活動が一気にナショナルに展開している。リニューアル後に福岡市美術館の評価が高まる、非常に重要な活動だと思う。

委 員： アニッシュ・カプーアの作品は、福岡市美術館で何度も見てきたが、今アジア美術館で展示されている方がよく見えた。福岡市美術館はこのように眠っている作品が多いと感じた。作品によっては、他の所で生きるものもあると思うので、リニューアル開館後も他館での展示を続けて、福岡市美術館の価値を上げてほしい。また、改めて学芸員が素晴らしい目を持ち、購入する作品を選んでいと感じている。学芸員が実力を発揮できる環境づくりをしてほしい。

会 長： 福岡市美術館の作品を活用した福岡市博物館での展覧会名に「読書」「博物学」「婚礼」「鉄砲」「幕末維新」などが出てくる。この用語は福岡市美術館からは出てこないと思う。

同じ作品を違う切り口で見ることができ、非常に新鮮である。この活動を続けることで、所蔵品に多面的な価値が出てくると思う。

アジア美術館はブックカフェをリニューアルし、貴重な蔵書の一部をここに置くということだが、管理はどうするのか。

事務局： 蔵書の管理については、司書と司書ボランティアの方とで、定期的な巡回を実施する予定である。また、ブックカフェには重複している蔵書を置く予定である。

会 長： 下階にある「アンパンマンミュージアム」によって、アジア美術館との間に壁ができて、通路として利用できなくなったのは非常にデメリットである。ブックカフェがリニューアルされても、人が入りづらく発展しないと思われる。行政の力で壁をなくすよう働きかけできないのか。

事務局： リバレインの再開発事業の中で、集客要素として「アンパンマンミュージアム」を誘致してきた。どういった事情で壁ができたかを調べて、壁をなくせるのかどうか、可能性を探っていきたい。

会 長： 以前、アジア美術館と「アンパンマンミュージアム」の客層は全く違うと言われたが、少なくとも、「おいでよ！絵本ミュージアム」との客層は一致すると思うので、行政からの指導として壁をなくしてほしい。

事務局： アンパンマンミュージアム側の著作権が非常に厳しく、壁をなくすことについて、最大のネックとな

っている。

委員： アンパンマンミュージアムは今後どのくらい続くのか。

事務局： 市全体としては続くことを望んでいるので、うまく共存できる方法を探っていきたい。

委員： 観光の拠点としてブックカフェを考えているのであれば、図書を並べるだけでなく、美術の専門家や博多部に詳しい方などの専門性を持った方を配置してはどうか。

福岡市美術館はボランティアの新しい活動として「街歩きアートツアー」をするということだが、各グループで考えたのか、一つ一つツアーの内容に独自性が出ており、単に鑑賞の場ではなく、生涯学習の場として市民が美術館を活用できる意欲的な活動だと思う。

事務局： ブックカフェについては、内閣府の地方創生拠点整備交付金に申請して、全体の事業費の半分の助成金をもらって整備をする。アジア美術館を博多部の観光の拠点をアジア美術館にしようという趣旨で事業を進めている。ブックカフェの整備はミュージアムの中で魅力的な空間づくりを目指しており、それそのものが観光のスポットになる。それ以外にも、広いイベントスペースを体験型観光の場としたり、博多部の街歩きの発着点にするという趣旨を含めて、拠点整備をする。この事業についても、アジア美術館だけでなく、官民一体となって博多部の観光拠点づくりに取り組んでいく。

会長： アジア美術館は交流事業のノウハウを蓄積しているので、美術に限らず外国人観光客など様々な層の人たちと対話できるような、常に賑わっている雰囲気づくりをしてほしい。

委員： ブックカフェは観光案内所としてJNTOの認定を受けるのか。

事務局： 受ける予定はない。ブックカフェを博多部の観光情報を発信できる場としたい。観光情報コーナーとして、リーフレットや伝統品を置くなど、観光部署と現在協議中である。

委員： こういった施設はお土産がよく売れる。手荷物を一時預かるなどは難しいと思うが、消費者目線でのサービスを拡充すると利用されやすいと思う。

「街歩きアートツアー」は素晴らしい取り組みだと思うので、ぜひ継続してほしいが、ボランティアの方の負担と実施時期・回数を考えていけば、料金設定が今のままでいいのか、ボランティアの方だけでいいのかなどがわかると思う。長崎や大阪ではこの街歩き活動が街の賑わいに繋がっている。また、ある程度の価格がないと質も良くなり、参加者も満足しないと思う。まずは来年度実施してみて、今後も続けられる仕組みづくりをしてほしい。

委員： 太宰府では、NPO法人で「歩かんね太宰府」というものがあり、参加費や助成金をもらい、街歩き活動をしている。

委員： 多言語化について、九州経済連合会の観光委員会では、QRコードを使った多言語対応の検討を始めた紹介があった。また、岐阜県高山市のホームページは12か国語に対応している。多言語化が進むことは大事だが、さらにその先を見据えることも大事である。

委員： 太宰府の一部では多言語化の表示を敢えて日英のみにしようとしている。その他の言語についてはQRコードなどで対応しないと、既存の大多数の方々が煩わしく感じてしまう。ホームページでは、奈良

県や和歌山県が先進的な取り組みをしており、8か国語に対応している。

内容もよく考えられているので参考にしてほしい。

会 長： 「街歩きアートツアー」については、ボランティアの方だけでは限界があるようなら、郷土史の専門家などを呼べば、より一層集客につながると思う。

委 員： 福岡市美術館は、休館中に新たな方向性を含みつつ活動しているという感覚が持てない。福岡や博多の価値を語っているが、美術館の固有性や地元におけるアイデンティティに絡めた企画がない。2年後のリニューアルオープンに向けて何か実験的な企画をしてほしい。

会 長： 来年度新たな方向性をもった事業はないのか。

事務局： アジア美術館は、開館以来、商店街を含めて博多部での展示やワークショップをしてきた。博多固有の文化を使ったレジデンス関係のプログラムは以前より目立つようになってきた。博多織を使ったファッションデザイナーとコラボした作家の展覧会や商店街16店を使ったビデオ作品の制作を行った。昨年度はインドネシアの作家が博多リバイバルプランと協力して博多部の様々な伝統工芸や街を使った架空のキャラクターのプロジェクトを実施した。来年度は東南アジアの展覧会を博多部の古い建物を使って展開したい。また、将来的にはトリエンナーレの博多部への展開を考えている。

事務局： 福岡市美術館は、平成28年度から全ての事業において、リニューアルオープンに向けてのリサーチや実験を兼ねている。リニューアル・クロージングプロジェクトの実施報告は次回行う。先ほど話題に上がった「街歩きアートツアー」も休館を機に、初めてボランティアの方が館外に出る事業である。現在は、一つ一つリサーチを進めながら、リニューアルオープンに向けてのミッションステートメントを固めている段階である。

委 員： 近年建築家がデザインした家具や什器の評価が世界的に高まっている。日本国内に目を向けると、前川國男建築は非常に注目を浴びており、その中でも、前川國男がデザインした家具や什器は今後更に世界中で価値が高まっていく可能性が高い。福岡市美術館では、その什器の一部は残していると聞いているが、残りの部分については、どうしたのか。処分したのであれば、どれくらいの量を処分したのか。

事務局： 主に、ロビー周りの椅子やテーブルなどは修繕して再利用する。それ以外のレストランや会議室の椅子、テーブルなどについては、新たな部屋の機能向上という観点から再利用が困難のため、市の他の施設で活用するほか、市内に店舗がある事業者で見積合わせを行い、売却の手続きを進めている。

委 員： 前川事務所の知人と話した中で、家具や什器については非常に価値が高いため、保存・利活用した方が福岡市美術館全体の価値も高まるのでは、という話があったが、どうも処分の方向に話が進んでいる。まずは、様々な利活用を考えた上で、最終的に一部を処分することはあっても良いが、オークションなどで世界中から買い手を募集して高値で売れば、そこで得られた資金を美術館の購入予算等にも充てられる。もうすでに、売却は決まったのか。

事務局： 売却の手続きがちょうど終わったところである。

会 長： 今回のリニューアルに前川事務所は関わっているのか。

事務局： 関わっている。

委員： ただ、この売却に関しては関わっていないようである。例えば、レストランの中にも素晴らしい前川の椅子が100脚程あったので、もっと利活用できる方向があったのではと思う。最終的に全体をいくらかで売却したのか。

事務局： 約30万円である。

委員： 椅子1脚でそれくらいの価値以上あるものを、全部で約30万円で処分しているので、非常にもったいない。

会長： 前川事務所は処分の件は知っているのか。

事務局： 今後の備品の方向性については、前川事務所には報告している。

委員： 前川事務所としても利活用してほしいとのことだったが、格安で売却してしまったので、福岡市美術館の価値の最大化という観点からも非常にもったいない。

事務局： 開館時に、家具は天童木工で作ってもらった。現在では、再利用できるものについては全て残してあり、それ以外の一部のものを売却した。我々が見て必要なものは全て継続して利用する。

委員： レストラン周りも天童木工のオリジナルである。可能であれば、売却をキャンセルして、世界中のデザインミュージアムに寄贈するなど、福岡市や福岡市美術館の名声が高まるような形で利活用した方が良いのではないか。

会長： 美術館職員が確認して必要なものは残っていると信じている。

委員： 前川事務所と共同で展覧会を実施するなど価値を高めるような取り組みをすれば、前川國男の名声も高まり、福岡市美術館の価値も高まり、家具や什器の件もより良い結果に結びついたと思うと、今回の件は大変残念である。

委員： 福岡市博物館との所蔵品のコラボは非常に待ち望んでいた。貸出の際に、展示内容についての学芸員同士の関わり合いというのはあるのか。

事務局： 福岡市博物館で考えられた企画であり、福岡市美術館が企画を持って行ったわけではない。元々、福岡市美術館にあった黒田家の資料が、歴史の部分だけ福岡市博物館に移り、その作品が今回再会した。その再会にあたって、ただの名品展ではなく、福岡市博物館で活用するうえで有効な美術資料を選んでもらっている。

現在、両館の学芸員によるギャラリートークなどの企画を検討している。

4 館長挨拶（内容省略）

錦織福岡市美術館館長挨拶

5 閉会